

共同研究の概要と経過

近代日本の兵士に関する諸問題の研究

一ノ瀬俊也

1 目的

近代日本の社会に戦争・徴兵の存在はいかなる影響をあたえていたのか、一方の民衆はそれをいかに受容し、結果太平洋戦争という破局に至ったのかという課題を解明するため、各メンバー独自の問題意識に基づく研究発表を実施して情報の共有化、一層の問題意識深化をはかる。近年ようやく活発化を見せてきた「軍隊と地域」の問題を、いまだ十分な解明がなされていない「師団と都市」、「防空」、「戦没者慰霊」などのキーワードをもとに解明していく。一方で各地域戦争関係展示施設の調査を実施して、そこにあらわれた〈日本人の戦争観〉および戦争展示方法論の分析も行う。その際、前記の目標を達成するために、展示実現までの経緯・社会的背景を重視する。これらの作業をもって、きたるべき現代展示の足がかりとする。以上の目的意識をもって、二〇〇一〜二〇〇二年度までの三年間、研究を行った。

2 研究組織（*は研究代表者、各分担者の所属は終了時）

新井 勝紘 専修大学文学部

荒川 章二 静岡大学情報学部

粟津 賢太 創価大学・東京家政大学非常勤講師
保谷 徹 東京大学史料編纂所
佃 隆一郎 愛知大学

土田 宏成 神田外語大学外国語学部

村瀬 隆彦 静岡県立掛川西高校

森山 優 静岡県立大学国際関係学部

宮地 正人 本館館長

久留島 浩 本館研究部歴史研究系

樋口 雄彦 本館研究部歴史研究系

*一ノ瀬俊也 本館研究部歴史研究系

3 経過

二〇〇一年度

第一回研究会 二〇〇一年六月二四日 於国立歴史民俗博物館

研究打合せ、今後の研究方針の確認

第二回研究会 二〇〇二年二月二・三日 於国立歴史民俗博物館

研究報告 一ノ瀬俊也「兵士が軍隊生活の「所感」を書くこと」

東京都内戦争展示施設（昭和館、平和祈念史料館）の調査見学

二〇〇二年度

第一回研究会 二〇〇二年六月二一、二三日 於沖繩県内

沖繩県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、南風原文化センターの歴史調査

森山優「諸外国の戦争展示について」

一ノ瀬俊也「歴博収蔵予定の中国戦線陸軍部隊関係資料について」

第二回研究会 二〇〇二年一月二二・二三、二三日 於東京都内

国立歴史民俗博物館、東京国立近代美術館（近代戦争絵画展示）、同

工芸館（もと近衛師団司令部）、千鳥ヶ淵戦没者墓苑、靖国神社遊

就館における戦争展示の調査

佃隆一郎「軍都」と陸軍軍縮

土田宏成「防空に対する国民動員システムの発達」

二〇〇三年度

第一回研究会 二〇〇三年八月三〇・三一日 於広島市内

広島県立平和祈念資料館、国立原爆死没者追悼平和記念館において博

物館調査

研究報告 村瀬隆彦氏「独立歩兵第六百二十八大隊関係資料について」

第二回研究会 二〇〇四年一月一一・一二日 於国立歴史民俗博物館

荒川章二氏「沖繩県平和祈念資料館について」

樋口雄彦氏「沼津兵学校に関する軍事史的覚書」

一ノ瀬俊也「近代日本の兵士と「マニユアル」——『兵卒須知』『軍人

文範』の世界——

4 成果

本研究では、近年注目を集めている「軍隊と社会」という問題関心、つまり軍隊の存在を社会はいかに支えたのか、また軍隊の存在は地域社会や民衆意識にいかなる影響を与えていたのかという問題意識をより深

化させるべく、研究報告・調査活動を行った。その具体的内容は前出の「2 経過」を参照されたいが、その結果七本の論文、一本の史料紹介を本誌に掲載することができた。その詳細は各論文をお読みいただくこととして、ここでは本誌の大テーマと、その中における各論文の位置の紹介のみにとどめたい。

第一点は、〈軍隊と社会〉の関わりに関してである。樋口雄彦論文は、幕末の静岡藩における軍制改革の過程を明らかにする。佃隆一郎論文は軍縮にともない、師団廃止となった各都市の動向を検証したもので、軍隊と社会の密接な関係を示したものと見えよう。また、土田宏成論文は一九三〇年代の海軍の宣伝活動を問うたものである。佃論文と同じく、軍の社会に対する「接触面」（宇垣一成）の多様さを示している。新井勝敏論文は、軍事郵便の研究が今後いかになされていくべきかについての展望を示した先駆的成果である。村瀬隆彦氏の史料紹介は中国戦線のある陸軍部隊の日常を示し、軍隊の秩序がいかに成り立っていたのかを示したユニークなものである。

第二点は、近年注目を集めている、戦死者慰霊・追悼の問題である。一ノ瀬俊也論文はもと従軍兵士によって「体験」記が書かれた背景と、そこから何をくみ取るべきかについての展望を示した。栗津賢太論文は沖繩に点在する記念施設の成り立ちを米史料もふまえて明らかにしたものである。

第三点は、日本、そして諸国民の戦争観を戦後の博物館展示から探るという問題意識である。荒川章二・森山優論文は、研究会での議論を通じ、それぞれ沖繩、そして欧米各国というある意味で対照的な戦争展示のかたちを示した。戦争展示が政治的側面を切り離し得ない中でこれに携わる者に何ができるのかを、鋭く問いかけるものとなっている。

（文責・一ノ瀬俊也）

（国立歴史民俗博物館研究部）